

日本医薬文化史 第1報 古代日本の医薬神について

辰野 美紀

順天堂大学医学部医史学研究室

1. 少彦名命(すくなひこなのみこと)説について

出雲神話におけるスクナヒコナを日本の医薬神であるとする元岡山大学文学部の間壁葎子教授は、まず、『出雲風土記』の記載への疑問を挙げている。

『出雲風土記』に見る薬草を調べ、分類してみると、全収載は、薬草61種(出雲地方の9郡に産する薬草を記載)であり、『出雲風土記』に、とびぬけて多くの薬草の記載があるのは何故か?という疑問が生じて来たという。例えば、

例：意宇(おう)郡

「風諸山野所在草木」(すべての諸山野にある草木は……)

附子(ぶし)(とりかぶと)(於宇おう とりかぶとの和名)

麦門冬(やますげ)

独活(つちたら)

前胡(のぜり)

高良姜(こうらはじかみ)

……その他」

草類はすべて薬草

現存している他の風土記と比較してみると、例えば、『播磨風土記』に収載されている薬草は、7種。また、『常陸風土記』に収載されている薬草は、2種である。

また、後の時代の『延喜式』を参照しても、出雲地方からの薬草の献上は多い。例えば、出雲各郡からの貢物(貢納品)としては、薬草53種を貢いでおり、これは全国では第3位となる数であった。そのうち、『出雲風土記』に無くて、『延喜式』のみにある薬草は21種であり、『出雲風土記』と『延喜式』と重なる薬草は、32種となっていた。

2. (宇佐)八幡神説について

日本薬史学会の杉山茂氏は、古代朝鮮語研究の立場から、日本(倭国)の医薬神は、八幡神であるという説を展開している。彼によると、東アジアにおいては、古来から、シャーマニズムの伝統が存在する。シャーマンとは、神、精霊、死者の霊などと直接、間接に交渉して、その霊力を得て、託宣、預言、治病などを行う宗教的職能者である。

倭国には、3世紀末から5世紀初めのころ、朝鮮南部の任那(加羅)から、シャーマン集団(巫医を含む)が大挙して移動してきたと考えうる。そして、倭国の巫覡(ふげき)集団(中国では巫は女性、覡は男性の巫医をさす。)の中心地は、豊前国綾幡郷(ぶぜんのかにあやはたごう)であったという。朝鮮では、女性の巫医を女巫(じょふ)(ムーダン)(巫女みこ)と言い、男性の巫医を男巫(だんふ)(バクスー)(博士)(占師)と称している。女巫は、薬草の採集、貯蔵、栽培、製剤も行っていたことが記録されている。

3~4世紀にかけて八幡神のうち、大国主命や少彦名命を司祭者とする祭祀集団が、石見、出雲地方に大挙移住し、彼らは、従来のシャーマニズムに加えて、出雲地方の酒と薬草(薬草酒)(毒酒)、などを活用することによって、後にその地方の医薬神と見なされるようになった。しかし、出雲大社をはじめ出雲地方の多くの神社は八幡神を祀っていることから考えても、全日本の医薬神は、もともとの八幡神であると判断できる。